

地域スポーツの発展と 大学スポーツの役割に関する研究

A study on the role that a university achieves
for development of community sports

総括研究員名：鈴木 邦雄

分担研究員名：松田 充生、三村 達也

少子化が進行している現状から、小学校、中学校では生徒数が減少している。これは学校におけるスポーツクラブ活動にも影響を与えており、各種のスポーツで部員が足りないことで、紅白戦ができないことや、ついにはクラブ活動そのものの存続が危ぶまれるような状況がでている。このようなことから、これまで学校が子供達のスポーツ活動に大きな役割を果たしていたが、将来の展望としてはあまり楽観的な観測はできない状況にある。学校でのスポーツ活動ができないとなれば、もうひとつ大きな集まりとしての、地域が子供達にどのようにスポーツの機会を与えていくかというような方法が模索されている。また、大学の指導者が、地域の子供達に早い段階で接して、長い年月を一貫性のある指導をしていくことは意義のあることであり、取り組む時期に来ている。

本研究ではこのような背景から、地域スポーツを発展させるために、大学の指導者はどのような取り組み方があるのかを探っていこうとしている。

第一年目は；

「親子スポーツ教室」を毎週、土曜日、午前10-12時に開催した。

親と子供と一緒にスポーツをする機会を作ることが主な目的であった。

スポーツ種目は、体育館のバドミントンコートで、「ミニテニス」「インディアカ」とした。

理由は、空き地のような、小さなスペースで、難しくなく、楽しめることができるもの、ということである。スポーツ教室を離れても、自分達でできることが重要なことであるからである。

この結果として、参加者が4組(10名)であった。当初、15組ほどの参加者を予定していた。

体力測定、感想などをまとめ、研究データとしての分析をするためには、これぐらいの数字を必要とするからである。しかし、参加者が集まらなかったのは、宣伝などが足らなかったことが反省点としてあげられ、地域スポーツの研究以前にやらなければならないことがあることが分かった。

第二年目として；大東市役所、大東市体育館に勤めている人たちにも協力してもらいながら、研究を進めることにした。具体的には、大東市の各自治体にも大阪産業大学が地域に人たちを対象にスポーツ教室を開いている宣伝ビラを配ってもらう。親子では対象が限定されるため、もっと広い年齢層で開催できるスポーツ教室にすること、などである。

今後の予測として、これまで子供達が学校で行ってきたスポーツ活動は、学校から地域にスポーツをする場所が変わっていくだろう。サッカーのJリーグの構想はすでに10年以上前に、このことを実践している。地域と一体になり、地域と共にサッカーを盛り上げていこうとしている。日常的に行うスポーツが健康の維持増進に有効な役割を持っていることから、大学がスポーツ施設を地域の人たちに開放し、リクリエーションとしての、健康の維持増進としてのスポーツ活動の場にしていくことができれば、大学が学生のためだけの場ではなく、地域に根ざした場として大きな役割を果たすことになる。